

尾道と文化

—大林宣彦の映画と地域開発—

片岡俊郎

はじめに

広島県尾道市は、揺れている。広島県が導入した民間人校長が尾道市立小学校に2002年4月着任後、1年も経たずに2003年3月、自殺する。さらに、2003年7月、事後処理を担当していた尾道市の教育次長が、自殺した。尾道市の教育・文化基盤が問われることになる。

大林宣彦の映画、新尾道3部作の第3作「あの夏の日 —とんでろじいちゃん—」(’99)は、尾道市制100周年記念映画と冠されている。映画は、小学生と高等学校の校長先生を務めたことがあるおじいちゃんの話であり、尾道市の人々、向島町の人々、御調町の人々の協力を仰いで製作されたとある。新しい尾道市が、尾道市と御調郡向島町・御調町と合併して誕生するとすれば、新しい尾道市の教育・文化基盤を、大林宣彦は映画で問題にしているといえる。

映画監督、大林宣彦は、講演で、故郷尾道を舞台にした映画は、「町起こし」ではなく、「町守り」であると言う(『キネマ旬報』2003年4月下旬号、読者の声欄)。大林宣彦の映画尾道3部作「転校生」(’82)、「時をかける少女」(’83)、「さびしんぼう」(’85)を原作と比較した場合、尾道出身で尾道をこよなく愛する大林宣彦でなければ、尾道を舞台にした映画の製作には結び付かないような気がする。一方、新尾道3部作、「ふたり」(’91)、「あした」(’95)、「あの夏の日 —とんでろじいちゃん—」

（'99）は、原作を尾道に移し替えても、違和感はない。大林監督の尾道3部作にあわせて、新尾道3部作を問題にすれば、大林監督が言う「町起こし」ではないにしても、「町守り」とはいえないように思う。新しい尾道市の誕生に向けた「町創め」^{はじ}にヒントを与えてくれているように思う。そのような考え方からすれば、尾道3部作と新尾道3部作の間にある尾道を舞台にした「野ゆき山ゆき海べゆき」（'86）、「日本殉情伝、おかしなふたり、ものくるほしきひとびとの群」（'86製作、'88公開）は、「町守り」から「町創め」への橋渡しであるような気がする。

尾道市の教育・文化基盤を考えるに際し、都市づくりの他の四基盤、産業基盤、生活環境基盤、保健・福祉・医療基盤、行財政基盤との関係で把握する必要がある。尾道市の都市づくりと大林宣彦の映画を結びつけるには、尾道3部作、尾道を舞台にした前掲2作、新尾道3部作の合わせて全8作で考える必要がある。

本稿では、大林宣彦の尾道を舞台にした8作を問題にする中から「新しい尾道の創造」とは何かを考えてみた。

I

私は、備後地方の経済情報誌『経済レポート』（1991年2月5日号～1992年5月25日号）に「観光と尾道 — 成瀬巳喜男と大林宣彦 —」として連載したものを大幅に削除、加筆、修正し、再構成したものを『福山大学人間科学研究センター紀要』第8号（1993年3月）に発表している。尾道市が、志賀直哉、林芙美子等との関係で文学の都市、小林和作等との関係で絵画の都市として知られてきたのであるが、小津安二郎の映画「東京物語」で知られ、尾道出身の映画監督、大林宣彦の登場により、映画の都市として注目を集めつつあることに着目して、尾道ゆかりの林芙美子作品を映画化した成瀬巳喜男と、尾道を舞台にした映画を発表中の大

林宣彦を比較することにより、尾道市が商都尾道から観光都市尾道へと移行するヒントを模索したものである。

映画監督、成瀬巳喜男（1905～69年）と大林宣彦（1938年～）を比較した一つの理由は、大林宣彦が「尾道3部作」といわれる「転校生」（'82）、「時をかける少女」（'83）、「さびしんぼう」（'85）を完成後、「新尾道3部作」の第1作「ふたり」（'91）を発表しただけで、他の2作は未発表だったことによる。¹⁾ 大林宣彦を成瀬巳喜男と比較する中で、「観光と尾道」との関係で一応の結論とした、在来線尾道駅前市街地再開発事業が目途がついた現時点で、完成した「新尾道3部作」を踏まえ、別の視角から現在の尾道と大林宣彦との関係を考えてみた。

拙稿「観光と尾道」から、結論部分を引用しておけば、次の通りである。

「映画の都市、尾道と言いつれたのは、尾道について映画から次のことを学び得たからである。

大林監督の尾道3部作からは、『転校生』（'82）においては、尾道の風景、即ち尾道の自然と歴史が、坂の上の中学校、木々に当たる微風、なだらかな坂道、神社の石段、港で示され、尾道の町は、古くて懐かしくて、帰る場所、即ち素晴らしい故郷であると語られる。

また、『時をかける少女』（'83）においては、尾道のかもし出している暖かい空気が、主人公3人と周囲の人々、即ち尾道の人々で示され、尾道の町は、暖かくて懐かしくて、観光客が多数訪れる観光の町であると語られる。

さらに、『さびしんぼう』（'85）においては、尾道の現在の経済的状況が、高校生の恋、即ち恋をしない、さびしくない人よりも、恋をすることはさびしいことではあるが、幸福であると感じる人々を通して示され、尾道の町は過去の経済的繁栄が懐かしくて、経済的再生を模索する

町であると、冬の尾道の風景で語られる。」²⁾

なお、新尾道3部作のその後発表された他の2作は、「あした」('95)「あの夏の日 —とんでろじいちゃん—」('99)である。

II

大林宣彦の尾道3部作、「転校生」の主人公は、中学生、「時をかける少女」「さびしんぼう」の主人公は、高校生である。少年、少女の目を通して見た尾道であるといえる。「転校生」では尾道の風景の素晴しさが、「時をかける少女」では、尾道の人々のかもし出している暖かい空気が描かれているのに対し、「さびしんぼう」では、少年、少女の恋を通して、尾道が、日本の経済繁栄の中で、経済的に取り残された存在であることが示唆されている。

大林宣彦、尾道3部作とは別の、尾道を舞台にした「野ゆき山ゆき海べゆき」('86)では、大林監督の視点が、尾道3部作から拡がり、深まっている。¹⁾尾道3部作からの拡がりとは、尾道の本拠にした空間的な拡がりであり、深まりとは、尾道3部作、第3作「さびしんぼう」で姿を見せ始めた経済的問題が、第2次世界大戦という戦争を扱う中で描かれ、尾道の今後の経済的繁栄を解く鍵を提起しているからである。尾道の今後の経済的繁栄を解く鍵は、尾道を戦後の「軽武装経済優先主義」を取って経済大国となった日本経済の中に位置付けた上で、現在においては、必ずしも資源、人口の多少に関係なしに、尾道の経済的発展の可能性を示唆している。また、「日本殉情伝、おかしなふたり、ものくるほしきひとびとの群」('86製作、'88公開)で、尾道は「光と影が入り混じり、町全体が死んだように眠っている」都市の舞台となっている。²⁾

映画の主人公は、尾道とおぼしき都市にふと立ち寄り、今で言うベンチャービジネスに取り組む20代の青年と、それを資金的に援助する30代

の青年、その友人で、一時、その土地から離れていたものの、帰ってきた同じ30代の青年である。少年少女の目から、青年男女の目で見直された尾道ともとれる。

ベンチャービジネスに取り組んだ青年は、資金的な行き詰まりから、その都市から出ていかざるをえず、資金的援助をした青年も闇金融業者であるが故に無理がたたたり、その都市から出て行く。残った他の一人の主人公も、闇金融業者であり、生き残れるかどうかは不透明である。

大林宣彦は、経済的繁栄には、科学技術の創造と金融的支援の重要性を認めつつ、主人公の動静から、映画の舞台となった都市に変化が見られないのは何故かをわれわれに問いかけているといえる。³⁾

大林宣彦作品を踏まえて、尾道市の金融的側面に注目して、尾道市の現状に言及すれば、次のようである。尾道には、尾道信用金庫が存在したが、1994年11月、三原信用金庫と合併し、かもめ信用金庫が誕生した時点で、信用金庫の本店は、三原市となる。

九州の地方銀行である西日本銀行尾道支店も、2000年7月、福山支店に統合される。広島県東部が広島県西部に比べて金融的に劣勢である中、尾道市が福山市、三原市と比較して金融的に地盤沈下していることは否めない。

新しい福山市農協は、広島県東部の6農協（福山市、福山北、松永市、沼隈、神辺、神石高原）が合併し、本年（2003年）4月1日に誕生、本所は旧福山市農協に置かれた。農協で見る限り、福山北が府中市農協とすでに合併していることを考慮すれば、福山市と神石郡3町1村（神石、三和、油木町、豊松村）、府中市、神辺町、沼隈町の垣根がなくなったことになる。福山・府中広域行政圏は、一体化されたのである。⁴⁾

尾道市農協は、世羅郡農協、尾道市の向東町農協、向島町農協、因島農協との合併を模索中と聞く。一方、三原農協は、瀬戸田町農協と竹原

農協との合併を考慮中と聞く。尾三広域行政圏は、二分され、しかも三原農協の合併は、広島中央広域行政圏からの竹原市を巻き込んだ合併劇といえる。⁵⁾

尾道市の金融的基盤が手薄な中でさえ、第2次、第3次産業の活性化と農協を結びつけるには無理がある。尾道市農協の他の四農協との合併が、第1次産業の活性化と結びつくためには、農協が第1次産業の資金的裏付けを保障する特定専門金融機関としての機能をまず果たす必要がある。

Ⅲ

大林宣彦の映画「新尾道3部作」第1作「ふたり」('91)、第2作「あした」('95)の原作は、赤川次郎(1948年～)である。赤川次郎『ふたり』、『午前0時の忘れもの』の舞台は、東京あるいは東京近郊である。

大林宣彦は、赤川次郎の前2作の映画化に際し、舞台を尾道あるいは尾道近郊(向島)にしている。赤川次郎『ふたり』では、姉が死亡する自動車事故は、トレーラーと本体をつないでいる1本の鉄の棒が折れて、トレーラーの下敷きになったことによる。大林宣彦「ふたり」では、姉の死は、坂道に停めてあったロードローラーのブレーキが甘かったために動き出し、ロードローラーの下敷きになったことによる。(映画のシナリオに拠る¹⁾)。

赤川次郎『午前0時の忘れもの』では、バスの湖への転落事故が、大林宣彦「あした」では、船の沈没事故、舞台となるバス待合所は、船の待合所に変更されている。

大林宣彦「ふたり」の坂道、転落事故の湖が海難事故に変更されたために登場する「あした」の海は、尾道特有の生活環境を示している。

赤川次郎『ふたり』では、姉と妹は、同一系統の女子中学生と高校生

である。姉の死後、妹が、死んだ姉と対話しながら、成長していく過程が描かれる。

赤川次郎『午前0時の忘れもの』では、バスの事故で死亡した恋人、夫、妻と子が、生きている恋人、妻、夫にメッセージを發し、午前0時に再会する物語である。

大林宣彦の映画は、舞台を東京から尾道に移し替えることによって、東京と尾道が、一方が都会で、他方が田舎との区別をなくし、東京で起こったことも、尾道で起こったことも同一に扱われ、都会と田舎で自然環境こそ違うものの、人間関係では、異なることが暗黙のうちに示されるのである。したがって、人間関係処理においては、赤川次郎と大林宣彦は、重なることになる。

人間関係ということになれば、『ふたり』の主人公の少女は、家庭環境、社会環境の問題を処理しながら成長していく。少女の世界は、拡がり、深まるのである。『午前0時の忘れもの』では、幼児、高校生、大学生、青年、壮年、老年を登場させることにより、幼少青壮老各層の人間関係を示し、それぞれの世界の問題点を突きつけている。

赤川次郎『ふたり』では、倒産、交通事故、ノイローゼ、イジメが、問題にされるが、尾道に移し替えれば、尾道の産業基盤、生活環境基盤、保健・福祉・医療基盤、教育・文化基盤の問題であるといえる。

赤川次郎『午前0時の忘れもの』のテーマ「死んだ人間は生き返れないけれど、生きている人間は死ぬことができる」という制約条件の下で描かれる人間関係の難かしさは、尾道に移し替えれば、尾道は、過去の栄光を強調するよりも、新しい尾道を創造することによってしか、死よりも生の方が上位であることを示すことが出来ないことが、事故に巻き込まれた当事者ではない第3者の目を通して示唆されている。なお、当事者の中に、暴力団組長が登場し、組内の抗争が描かれ、組関係以外の

人々を巻き添えにする。『ふたり』では抜け落ちていた尾道の行財政基盤が、人々の安全確保という観点から示されるのである。

大林宣彦の赤川次郎への関心は、尾道ゆかりの作家、志賀直哉、林芙美子ではないことに意味がある。志賀直哉、林芙美子で尾道を問題にする限り、過去の尾道でしかない。赤川次郎の作品を現代の尾道に移し替え、尾道新3部作として世に問う映画作家大林宣彦に、現在の尾道があり、現在の尾道の未来へのヒントがある。過去の歴史を尊重するか、新しい歴史を創造するかの問題が、大林宣彦の作品には存在するのである。

大林宣彦の映画「新尾道3部作」第1作「ふたり」（'91）、第2作「あした」（'95）の原作者は、赤川次郎であるのに対し、第3作「あの、夏の日 —とんでろじいちゃん—」（'99）の原作者は、山中^{ひさし}恒（1931年～）である。「尾道3部作」の第1作「転校生」（'82）、第3作「さびしんぼう」（'85）の原作者でもある。なお、第2作「時をかける少女」（'83）の原作者は、筒井康隆（1934年～）である。

大林宣彦は「あの、夏の日 —とんでろじいちゃん—」の冒頭で、「20世紀を生きたおじいちゃんと21世紀を生きるこどもたちにこの映画を贈る」と、また、映画の最後で、「わが古里尾道よ、文明の尻っぼたるより、文化の頭たれ」とメッセージを字幕で入れている。夢を求める少年と、少年の夢を持ち続けたおじいちゃんの物語である。

東京近郊の小学校5年生の少年が、ぼけたといわれる高等学校の校長先生を務めたことがある、謹厳実直な尾道のおじいちゃんを訪ね、一夏を一緒に過ごす。

おじいちゃんは、おばあちゃんにツバメのようにすいすい飛ぶと言うが、おばあちゃんは信じない。しかし、少年は、おじいちゃんを信じ、尾道水道を隔てた向島に、おじいちゃんと一緒に飛んで渡り、不思議な体験をする。今はほとんどいないといわれているメダカ、フナ、ドジョ

オを美しい小川で見るだけでなく、コイと話をし、コイが歌を唄う光景に接する。

向島では、また、お寺で右手小指のない弥勒菩薩を不思議に思い、おじいちゃんの少年時代へと溯る。おじいちゃんがミロク様の小指に止まった玉虫をトリモチ付きの棒でとろうとして、誤ってミロク様の右手首まで叩き落してしまう情景にでくわす。玉虫には、おじいちゃんの少年時代の少女との恋がからんでいる。おじいちゃんと少年の夢の共有であり、夢と現実とは、交叉し、ミロク様の小指は、70年ぶりにみつき、おじいちゃんの誤解は解かれ、小指が元のミロク様に戻った時点で、おじいちゃんは、亡くなる。

少年は、家へ帰り、夏が過ぎ秋になってもぼーとしたままである。少年の机の上には、おじいちゃんの恋人であった少女のお姉さんの孫娘の高校生からもらった宝石箱に入った死んだ玉虫が置かれている。窓の外をおじいちゃんが、昔の恋人の少女とおばあちゃんと手をつなぎ、3人は幸せそうに飛んでいくのを少年は目にする。

大林宣彦「あの、夏の日 —とんでろじいちゃん—」は、夢を求める少年と少年の夢を持ち続けたおじいちゃんの物語であることを、尾道に移し替えれば、次のように整理できる。少年とおじいちゃんは、夢を持ち、夢を共有し、夢を実現させた。大林宣彦の言う、「20世紀を生きたおじいちゃんと21世紀を生きるこどもたちにこの映画を贈る」というメッセージは、大林宣彦が、尾道の人々にも、夢の存在の確認と夢の共有、夢の実現を求めていることになる。言い替えれば、大林宣彦は、尾道の人々に、尾道に、共有できる夢（理想）を持つことを求め、その実現に邁進することを希望しているのである。

また、大林宣彦の言う「わが古里尾道よ、文明の尻っぼたるより、文化の頭たれ」というメッセージは、尾道の人々が尾道の都市づくりに夢

(理想) を持って取り組み、実現させるためには、文化の頭であることを前面に打ち出すのが故に示された言葉であり、文明の尻っぽであってよいとは言っていないことになる。大林宣彦の経済問題への言及は、文明と密接に関係がある経済基盤の充実が伴わなければ、文化の頭たることは難しいことを示しているからである。その意味において、尾道3部作と新尾道3部作の間にある2作「野ゆき山ゆき海べゆき」、「日本殉情伝、おかしなふたり、ものくるほしきひとびとの群」は重要である。尾道の人々が、幼少青壮老から構成されていることを考慮すれば、経済基盤の担い手である青壮においては、夢は、経済基盤と結びつけた夢(理想) でなければ、幼少老との理想の共有はありえず、ましてや夢(理想) の実現は不可能なのである。

尾道市民、幼少青壮老の共通の夢(理想) とは、尾道の都市基盤である、産業基盤、生活環境基盤、保健・福祉・医療基盤、教育・文化基盤、行財政基盤の確立であり、そのためには現時点で尾道の5基盤の問題点を洗い出し、その問題点解決の過程から夢(理想) は見えてくるのである。

おわりに

広島県の尾三広域行政圏においても、合併問題は急速に進展中である。尾道市は、御調郡向島町・御調町と合併し、新しい尾道市が誕生する予定である。一方、三原市も豊田郡本郷町、御調郡久井町と合併し、新しい三原市となる予定である。

三原市・本郷町・久井町合併推進協議会は、合併に際して『新市将来構想—海・山・空、夢ひらくまち』(2003年8月)を作成した。

「新市将来構想」は、第1部、序論、第2部、新市の将来像、第3部、新市の将来構想、用語解説から成る。

新市将来構想策定の経緯については、次のように述べられている。

「2002（平成14）年7月24日には、任意の三原市・本郷町・久井町合併推進協議会を設置し、3市町の合併に関する基本的な事項などを協議するとともに、新市将来構想（まちづくりビジョン）を策定することとしました。」

新市将来構想策定の目的は、次のようである。

「新市将来構想（まちづくりビジョン）は、三原市・本郷町・久井町の3市町の特性を踏まえつつ一つの市として捉え、その合併の効果を明らかにするとともに、10年後を想定した将来像を描くことにより、合併後の新しいまちづくりの基本的方向を住民に提示し、その理解と協力のもとに合併後のまちづくりを推進することを目的として策定するものです。」

新市将来構想の位置付けと役割については、次のように述べる。

「新市将来構想（まちづくりビジョン）は、法定の合併協議会が設置された場合に、新市の施策を総合的かつ効果的に推進するために実施事業等を定める新市建設計画を策定するに当たっての基礎資料となるものです。」

また、住民に新市の将来展望や合併の効果等に関する情報を提供することにより、合併への気運を高めるとともに、合併後のまちづくりについて住民参加のもとに考えていくための基礎資料としての役割を担います。」

新しい三原市の将来構想は、第3部で、第1章「人がふれあい、ともに参画するまち」、第2章「人を育む教育・文化のまち」、第3章「健やかに暮らせるやすらぎのまち」、第4章「自然と共生する快適で安全なまち」、第5章「活力ある産業のまち」、第6章「交通・情報・観光基盤の充実した交流のまち」として示されている。

都市（まち）づくりに必須な行財政基盤、教育・文化基盤、保健・福祉・医療基盤、生活環境基盤、産業基盤にあわせて広域基盤が示されるのである。以上の六つの目標像が実現されることによって、新しい三原市は「一人ひとりが輝くまち」、「幸せが実感できるまち」、「活力を生み出すまち」が達成されると、第2部「新市の将来像」、第3章「まちづくりの理念と目標像」で示唆されている。また、まちづくりの理念を示す新しい三原市全体のキャッチフレーズとして、「海・山・空、夢ひろくまち」が選定されている。三原と海、久井と山（高原）、本郷と空港が含意されているのである。

尾道市が、御調郡向島町・御調町と合併し、新しい尾道市が誕生するとすれば、1市2町の新市将来構想策定は必要である。

尾道市が、向島町、御調町を考慮した、産業基盤、生活環境基盤、保健・福祉・医療基盤、教育・文化基盤、行財政基盤の従来の都市づくりに必須な5基盤の問題点をあげ尽したとしても、不十分である。前記「新市将来構想」で示された、少なくとも、尾三広域行政圏の三原市、因島市との関係、さらに、福山・府中広域行政圏を含む備後地方生活圏との関係、即ち広域基盤の問題点にまで及ぶ必要がある。観光都市尾道にとっては、交通・情報・観光基盤の充実は不可欠だからである。また尾道における金融基盤の弱体化も広域基盤でカバーしなければならないからである。

（なお、三原市・本郷町・久井町合併推進協議会の新市将来構想策定委員会委員は、学識経験者、3人、3市町の住民、18人、3市町の職員、9人から成る。私は、新市将来構想策定委員会委員長を務めた。2003年8月19日、三原市・本郷町・久井町合併推進協議会は、法定協議会設置届書を広島県に提出、同時に、第1回協議会を開き、2005年3月22日に、新しい三原市を実現させることを目指して、協議を進めている。）

Iの注

- 1) 映画「転校生」は、『世界映画作品・記録全集、1983年版』（キネマ旬報社、昭和58年）に、次のように紹介されている。

〔'82）中学生の男の子と女の子がある日突然、入れ替わってしまった。男の子は急に女の子っぽく女の子は急に男の子っぽく……しかし周囲は、だれも気づかない。ケストナーの童話『ふたりのロツテ』を思わせる茶目っ気たっぷりの“小さな恋のメロディ”。才気あふれる大林監督が、その才気を抑制し、実に初い初いしく“思春期の感情”をうたい上げている。尾道の中学校。斉藤一夫（尾美としのり）は8ミリ好きの中学3年生。ある日、斉藤一美（小林聡美）という名前が1字しか違わない利発な女の子が転校してきた。一美は一夫を見るなり『あなた同じ幼稚園に行っていたデベソの一夫ちゃんじゃない』と聞く。二人は幼なじみだった。再会を喜ぶ一美に反して仲間からからかわれた一夫は迷惑顔。学校の帰り、神社の石段でもめているうちに二人は石段を転げ落ちた……。気がついたら、なんと二人の体が入れ替わってしまっていた。二人は驚き当惑するが、しばらくは、このことを秘密にしておくことにする。急に女っぽくなった一夫と、男っぽくなった一美の珍妙な“入れ替えごっこ”が始まる。二人は初めは互いの体に嫌悪を覚えるが、やがてそれぞれに異性として相手を意識していく。一夫が父（佐藤允）の転勤で急に引っ越すことになってから二人は急速に心を通わせ合う。一時は自殺を決意した二人だが、ある日また神社の石段から落ち……。気がついたら元に戻っていた。一夫の引っ越しの日、走り出したトラックを一美は追って走り出した。それを8ミリで撮る一夫。『サヨナラ、オレ』『サヨナラ、あたし……』。ここでは“入れ替えごっこ”が一つのイニシエーションになって二人は、おとなへと近づいていく。大林監督の故郷・尾道の風景がいい。港、なだらかな坂道、坂の上の中学校、木々に当たる微風、神社の石段……そして夏の中学生は黒い学生ズボンとワイシャツに運動靴というスタイル。思わず“高度成長以前”の子どもたちを思い出し懐かしくなる。女性化した一夫より男性化した一美のほうが元気いっぱいなのは皮肉。現代では“男らしさ”は女の子によってのみ表現されるのかもしれない。共演は樹木希林、宍戸錠、入江若葉、志穂美悦子。（川本三郎）（日本テレビ放送網＝ATG提携作品、松竹配給、113分）〕。

映画「時をかける少女」は、『世界映画作品・記録全集、1985年版』（キネマ旬報社、昭和60年）に、次のように紹介されている。

〔('83) 大林監督が『転校生』'82に続いて（脚色も同じ剣持）郷里の尾道にロケして作った作品。高校の土曜日の放課後、掃除当番の芳山和子（原田知世）は実験室で物音を聞きつける。入ると床に落ちたフラスコの液体が白い煙を立てていて、彼女はラヴェンダーの香りに包まれて気を失う。和子は、自分を保健室へ運んでくれたクラスメイトの堀川吾朗（尾美としのり）や深町一夫（高柳良一）とともに実験室の様子を見に行くが、部屋は何事もなかったように整然としている。それ以来、和子は時間がでたらめになったような奇妙な体験をするようになる。ある夜、地震で外へ飛び出した彼女は、吾朗の家に火の手が上がっているのを見て駆けつける。火事はボヤですみ、様子を見に来ていた一夫と和子はいっしょに帰った。翌朝、学校で和子が吾朗に地震のことを話すが、地震などなかったと言う。そして始まった授業は、昨日とまったく同じ内容だった。その夜も地震と火事騒ぎがあった。和子はこれらの不思議を一夫に打ち明けるが、一時的な超能力だろうと慰められる。しかし納得のいかない和子は、一夫の家の温室でラヴェンダーの香りをかぎ、再び気を失い、気がつくとも一夫が植物採集をしている海岸の崖へテレポート（身体移動）していた。和子は一夫に、不思議が起こるきっかけとなった土曜日の実験室にもどりたいたいと言う、時を駆けた和子が実験室のドアを開けると、そこには果たせるかな一夫がいて、自分が西暦2660年の薬学博士で、必要な植物を入手するためこの時代へ来たこと、自分にかかわった人々には念波を送って都合のいい記憶を持たせていたことを告白し、別れを告げる。和子はいっしょに未来へ行きたいと言うが、説得され、ラヴェンダーの香りがかがされ床に崩れる。一夫にまつわる記憶を消された和子は、11年後、勤め先の大学薬学部研究室で、実験室を訪ねてきた一夫とすれ違う。（森卓也）（角川春樹事務所作品、東映配給、104分）〕。

映画「さびしんぼう」は、『世界映画作品・記録全集、1987年版』（キネマ旬報社、昭和62年）に、次のように紹介されている。

〔('85) 大林宣彦が『転校生』'82、『時をかける少女』'83に続いて三たび、自分の故郷である尾道を舞台にSFの設定を織り込んでアドレッセンス（思春期から大人への過渡期。注、片岡。）の情感を描いた典型的な大林調青春映画の佳作。高校2年生でカメラ好きの寺の息子、ヒロキ（尾美としのり）は、愛用のカメラの望遠レンズを通して近くの女子高校をのぞいているうちに、放課後に学校のピアノで『別れの曲』を弾いている橋百合子（富田靖子）を見てから彼女をひそかに“さ

びしんぼう”と名づけて、あこがれつづける。母のタツ子（藤田弓子）はヒロキに口やかましく勉強しろと言ひ、またなぜかピアノの練習を強いる。寺の大掃除の日、ヒロキと手伝いに来た友人がタツ子の少女時代の写真の束を庭に散逸させてしまうという小事件が起こると、その日からヒロキの前に、ピエロのメイクアップをして“さびしんぼう”と名乗る奇妙な少女（富田靖子の二役）が出没するようになる。ヒロキは、あこがれの百合子が自転車のチェーンを外してしまって困っているところに通りかかり、それをチャンスに彼女を家まで送っていくうちに“あなたのことは前から知っていた”と聞いて幸せな気分を味わう。ヴァレンタイン・デイに“さびしんぼう”が現れ玄関に置いてあったと言って差し出したチョコレートは百合子からのプレゼントだったが、添えられた手紙には“この間はうれしかったけど、もうこれっきりにしてください”と記されていた。“さびしんぼう”は、明日、自分の誕生日で一つ年を取ると、もうヒロキのところに来られないと告げ、自分の扮装は失恋した少女の創作劇のものだと言う。翌日、つのもる思いを抑えかねたヒロキは百合子の家を訪れ、別離の記念にと『別れの曲』のオルゴールを贈る。ヒロキが帰宅すると、“さびしんぼう”が雨にずぶぬれの姿で待っている。ヒロキが思わず“さびしんぼう”を抱き寄せると彼女はフッと消え去る。翌朝、タツ子は道に落ちていた自分の少女時代の写真を拾うが、それはまさに、あの“さびしんぼう”の写真であった。数年後、寺を継いだヒロキのそばには妻となった百合子の姿があった。（渡辺武信）（東宝映画＝アミューズ・シネマシティ提携作品、東宝配給、112分）。

2) 『福山大学人間科学センター紀要』第8号、179ページ。

II の注

1) 拙稿「観光と尾道—成瀬巳喜男と大林宣彦—」から、「野ゆき山ゆき海べゆき」についての結論部分を引用しておけば、次の通りである。

「『野ゆき山ゆき海べゆき』（'86）においては、場所的には、尾道市を本拠として、福山市鞆、福山市松永・三原市糸崎へと拡がり、経済的問題の扱いは、経済的貧しさを描くに、時代的には第2次世界大戦初期を設定し、経済的繁栄とは何なのかと問いかけることにより、深まりを見せる。

大林監督に言わせれば、『根も葉もあってウソっぽく映る映画』ということになるが、尾道市の経済的問題は、尾道市1市で考えるよりも、広島県東部的観点で

処理されなければならず、戦後日本の軍事力から経済力への転換が、物から人、財から用役（サービス）重視の観点を導き出したが故に、資源にこだわるよりもノウハウで解決されなければならないと読み取れる。」（前掲書、179ページ）。

映画「野ゆき山ゆき海べゆき」は、『A MOVIE・大林宣彦』（石原良太・野村正昭編、芳賀書店、1987年）に、次のように紹介されている。

「第2次大戦初期の頃の瀬戸内の島。小学生の大杉栄は、乱暴な性格が原因で第2尋常小学校から転校してきた。第1小学校に通う須藤総太郎は、栄を連れて来た姉のお昌ちゃんを見て、一目で淡い恋心を抱くのだった。しかし、お昌ちゃんには筏乗りの勇太という恋人がいた。栄はさっそくクラスのガキ大将ボンチャンとその子分どもを叩きのめした。喧嘩はどんどんエスカレートして、遂に第2小学校との争いとなった。お昌ちゃんから相談を受けた総太郎は武器を使わない戦争ごっこを提案した。その頃、戦争は子どもたちの遊びだけではなく、大人たちの世界にも広がっていた。戦争ごっこの1日目、総太郎の作戦が成功して第1小学校は勝利する。その夜、町は日本軍の勝利で大人たちも大騒ぎしていた。総太郎たちの担任の川北先生も酔っぱらってしまい、お昌ちゃんと一緒にいた平和主義者の勇太に、嫉妬から非国民とからむのだった。翌日、子どもたちは捕虜の交換を行い、その日、戦争ごっこは石の投げ合いにまでになってしまった。そこで、栄と総太郎はタライ舟で先に落ちた方が負けという1対1の決闘をすることになった。お昌ちゃんが審判になったが、そこへ筏の勇太が現れ、彼女は決闘をそっちのけで筏の方に行ってしまった。その頃、金に困っていた飲んだくれのお昌ちゃんの父は、彼女を女郎に売る約束をしていた。またエリート将校の青木がそんなことも知らずに思いを寄せていた。結局、総太郎は手の骨を折ってしまい、謝りに来たお昌ちゃんは、栄は妾の子のため兵学校にも行けず、また異母姉弟の自分に恋してしまったことから乱暴になったのだと総太郎に話した。数日後、勇太に赤紙が来た。彼はお昌ちゃんと駆け落ちを決意するが、友人の戦死を知り、その遺骨を抱く老母の姿を見て戦争に行くことを彼女に告げる。お昌ちゃんや島の娘たちが四国に売られて行く日、総太郎たちは娘たちを逃がすことに成功するが、帰るところのない彼女たちは港の船に戻るしかなかった。お昌ちゃんが売られることを知った勇太は、脱走して小舟で彼女の乗る船に近づく。勇太を見たお昌ちゃんは、近くにあった石油をかぶり、近寄ったら火をつけると言いながら、勇太の小舟に乗り移った。その時、青木中尉が燈台から撃った弾が勇太を貫いた。お昌ちゃん

んは勇太の死に、自らの体に火をつける。二人は小舟とともに水の中へ沈んでいった。」

- 2) 私は、映画「日本殉情伝、おかしなふたり、ものくるほしきひとびとの群」を、『ワンス・アポン・ア・タイム・イン尾道』（フィルムアート社、1987年）によりながら、拙稿「観光と尾道」において次のように紹介している。

「18年後、青年となった山倉修（25歳）は汽車に乗り、とある海辺の町に着く。光と影が入り混じり、町全体が死んだように眠っている。『この町はどこかほくに似ている』と思った山倉は、町はずれの廃船の中で暮らすようになる。

波止場で海を見つめていた山倉は、室田幸男（32歳）というヤクザ風の男と知り合う。室田はいつもまっ赤な背広を着、海潮会という金貸しの組織で恐喝まがいの取り立ての仕事をしている男だが、なぜかお人好しである。山倉に不思議な魅力を感じた室田は、彼に500万円の投資をする。山倉はその金をもとに独自に開発したヒラメの養殖を実行にうつすのだが、あえなく失敗してしまう。」

成田和美（32歳）は、室田の幼なじみで、数年ぶりにこの町に帰って来る。成田と室田は、海潮会の事務所「ローズ・モナミ」で再会する。

「二人には共通の苦い思い出があった。18年前、ピアニスト志望であった少年成田は、将来パリに行ってピアニストになることをひとりの少女と海で約束した。少女の名は夕子（7歳）。夕子と結婚しようと誓った成田は、室田を立ち合い人にして、3人で指切りの約束をしたのであった。だが、やがて夕子が美しく成長すると、控え目な存在であった室田が、かねてから秘めていた思いをうちあげ、彼女を妻にしてしまった。成田の後ろにくっついてるのが分相応だと思っていた室田に、夕子は、『ゴツイだけのひとが好きです』とほほえみながら言う。3人の指切りは破綻することになり、成田と室田はふっきれない思いを胸に秘めたまま、それぞれの道を歩む。」

山倉は、なお夢を追い続け、プラスチックを食べるゴミ処理用のバクテリアの試作に取り組む。室田はコリもせず、再び彼に投資する。一方、山倉へのコゲツキから、室田は無理な取り立てを行わざるをえなくなり、恐喝の容疑で逮捕され、保釈金、500万円が必要になる。室田は、恩師である小学校の校長、正田にも金を貸している。正田が借金を返せず死んだため、室田の事務所で働いていた娘、紅子が、一目惚れした室田のために屋敷を売り払い、保釈金を支払ってしまう。しかも、山倉の試みは、またしても失敗に終わる。

「この町で自分の愛と夢を追い続ける女は、彼女たち（夕子と紅子）だけではなかった。成田の母であり、海潮会の女親分である夜会巻のおせん（62歳）。彼女は敵対する浜勝組の親分の愛をはねのけ、スクリーンの中の幻の男（水城龍太郎）を愛し、彼の出演する『上海帰りのリル』を瀬戸内シネマで上映しようとする。だが、その上映館の権利金が、またしても500万円、その支払い先は皮肉なことに浜勝組であった。

支払うあてもないまま、誰も入らない映画館の中で、七夕の夜、シネマは幕を開ける。おせんは、かつて龍太郎を取りあったライバルの夜泣きのおたか（62歳）と、少女時代の過ぎ去った愛を語り合いながら、互いにかんざしで刺し合って死んでゆく。同時に映写室からも火が出、映画館は炎につつまれていく。

おせんの死後、彼女の借金をかかえた海潮会は離散し、成田と室田の二人だけが最後に残る。すべてを失っていくかのような二人——。画面はまたしても彼らの過去に戻り、ここではじめて二人の謎が明かされる。

7年前、成田の婚約者・夕子を奪った室田は、指切りげんまんの誓いを破った自分を恥じ、償いに小指をナイフで切り落とそうとする。だが、それを見ていた成田が止めに入り、もみ合い、押し問答をするうち、彼のほうが誤って小指を切り落としてしまう。夕子を失い、ピアニストとしての小指までなくしてしまった成田。」

「狂おしげに対峙する二人。過去の記憶を現在と交錯させながら、彼らは激しい殴り合いを始める。階段で、町の橋の上で、あるいは路地裏で、肉体と肉体はぶつかり、転げまわる、おかしなふたり。本来エリートであった者が美しい女性とピアノを失い、逆にただゴツイだけの男が、思わぬ幸運をつかんでしまった皮肉。

だが、二人はそれでも過去に呪縛されているばかりではなかった。成田は組の引き継ぎを決意し、室田は夕子と娘を連れ、念願かなってこの町を出ていく。ボートをこぎながら出ていく室田親子。」

また、山倉も町を立ち去る。（175～176ページ）。

- 3) 拙稿「観光と尾道 —成瀬巳喜男と大林宣彦—」で扱った大林宣彦作品は、尾道3部作と尾道を舞台にした「野ゆき山ゆき海べゆき」、「日本殉情伝、おかしなふたり、ものくるほしきひとびとの群」の5作である。
- 4) 広島県は、広島地方生活圏、備北地方生活圏、備後地方生活圏から構成され、広島県の広域行政圏との関係からすれば、備後地方生活圏は、福山・府中広域行

政圏と尾三広域行政圏から成る。福山・府中広域行政圏は、2003（平成15）年2月3日に、福山市と合併した芦品郡新市町、沼隈郡内海町を含み、神石郡3町1村（神石、三和、油木町、豊松村）、府中市、深安郡神辺町、沼隈郡沼隈町から構成されている。なお、甲奴郡上下町は、2003年4月15日付で備北広域行政圏から福山・府中広域行政圏に変更されている。

- 5) 尾三広域行政圏は、世羅郡3町（甲山、世羅、世羅西町）、御調郡3町（御調、久井、向島町）、豊田郡本郷町、三原市、尾道市、豊田郡瀬戸田町、因島市から構成されている。

Ⅲの注

- 1) シナリオ作家協会編『'91年鑑代表シナリオ集』（映人社、1992年）。